

せたかむい

古平町役場総務課
842-2181(代表)
平成20年7月1日

年表で読む 古平の歴史

130

商工業

⑬

無限責任大典記念

古平信用組合

◇経営不振の灌漑溝組合

を資金援助

明治の頃から古平川流域では農耕が行われ、市街地に近いところでは果樹栽培、特に開拓使からリンゴの苗木を配付されたことから、チョペタンの沢の石井常助らが栽培し、それが浜町から港町、丸山麓方面にまで広まり、浜町では関口利勝が自宅周辺（現在のパークゴルフ場付近）から古平河畔に

至るまでの広い地域でリンゴ栽培を行っていた。

その後、明治三〇年代から大正時代になると好況に支えられ、栽培する農家が増えて生産高も増大し、リンゴの収穫時期になると、本陣の浜へ帆船が接岸してリンゴの積み出しを行っていた。

ところが、大正時代の中頃になるとリンゴの病虫害が激増し、折から米の価格が上昇したこともあり、古平町の農家はこぞつて水田への転作を図ったが、それには先ず灌漑用水（かんがい水路を作つて水田に水を引く）の確保が重要な課題であった。

古平町の農業地帯では古平川の

支流が多く流れ、水量も豊富で水利の便は良かったが、灌漑用水を引くための灌漑溝の設備がなかった。そのために灌漑組合を結成して資金を借り入れ、古平川流域の平野部一帯には美田が造成された。しかし、昭和初期の米価の低落で灌漑組合の経営が行き詰まってきた。灌漑組合から運営の委任を受けた信用組合では、これが古平町発展のための事業であるとの観点から、日本勧業銀行などから長期の借り入れをして資金を貸し付け、梅野理事長が灌漑組合長に就任して経営の立て直しを図った。

その後も苦しい経営状態が続いたが、職員の津田精（後に常務理事）が貸付金の回収と整理に努め解決をみたのである。

◇入舟支部を開設

スケソ漁業もようやく軌道に乗ってきたが、資材の購入や漁獲物、農産物などに関するの購買や販売にも信用組合の資金が要望されるようになってきたので、昭和二十一年一月、入舟支部を開設して購買、販売事業を行い、古平魚菜市場をも開設した。

これにともなつて、産業組合法により名称を「無限責任古平信用購買販売利用組合」として認可を受けた。創立の時の記念として、それ以来の特色であった「大典記念」の文字がここので無くなった。

◇水産加工場を設置

また組合では、濱町浜通りに直営の水産加工場を設置し、外山音吉を主任としてスケソの加工を始めた。魚卵を抜いたあとの魚体が安かったことからこれをみりん干しにし、ローラーで伸ばして柔らかくしたものを『うまい肴』の名称で売り出したところ、これが好評で遠く上海方面まで販路が拡がって行った。この好調な販売実績により、町内でも同様な製品を製造する加工場が出来た。

昭和十五年一月の組合役員会で、水産加工業が順調に進んだことからニシンのくん製も手掛けたらどうか、と話し合われたが、ニシンが不漁期に入り、原料の確保が不安定なことからこれは見送られた。水産加工場の経営は昭和十九年一〇月まで続けられたが、国の指導により、関連業務は古平漁業協

同組合へ移譲されることになった。

◇魚菜市场経営の思い出

古平信用金庫『60周年を迎えて』の記念誌の中で、当時の魚菜市场について越中庄七理事長の談話がある。

「そうですね。一番思い出に残っているのは、魚菜市场を経営していた当時のことです。もともと古平町には、古平漁業購買販売組合という協同組合がありまして、この組合が魚菜市场をもっていたのですが経営に行き詰まり、私どもの組合に買ってくれとの話があり引き受けたのです。魚菜市场はなかなかおもしろかったですよ。夕方、船が港に戻って獲った魚を陸揚げしてセリがはじまるのです。最初は、一日の売り上げ高が千円以上あれば、仲買人にお祝いとしてお酒を一升出していたのですが、それが毎日続くので、途中から三千円に上げました。セリが終ってから帳簿を整理し、家に帰るのは九時か十時で、バスもハイヤーもないのでせいぜい自転車、雨の日は浜町まで歩いて帰ったものです。もちろん現在のように時間外

手などはありませんでしたが、みんなは少しの不服もなく働いたものです。亡くなられましたが漁組の本間金夫さん、竹村部長さんのお父さん、長内武太郎さん、戦死された後藤敏一さん、みんな懐かしい人ばかりで、みんな過去の人となつて残ったのは私一人になりました。」(昭和五〇年七月)

◇関連業務の移譲

昭和一六年八月、日中戦争の長期化と、アメリカやイギリスとの緊迫した状況の中で、重要産業統制令が公布された。これによつて従来の産業団体の機構を改めなければならなくなり、産業組合として扱つてきた関連業務を一切移譲するようにとの指導があり、数度の役員会をひらいた結果、政府の方針を受け入れることに決まった。古平信用購買販売利用組合では、農業関係の古平灌漑溝組合を古平農業協同組合へ、漁業関係の魚菜市场一〇隻の発動機船、その外これらに付属する土地や建物的一切を古平漁業協同組合へ移譲することにし、すべてが完了した昭和一九年一〇月一〇日、無限責任古

平信用組合と改称し、創立当時の信用組合に戻つたのである。

さらに昭和二〇年六月一日、市街地信用組合法が施行されたことにより、創立以来の産業組合法による信用組合に代り、市街地信用組合として名称も古平信用組合と改称した。

◇終戦による

混乱からの再出発

昭和二〇年八月一五日の終戦による混乱の中、けわしい経済情勢の中で、古平信用組合もかつてなて厳しい対応を迫られることになった。

このことについては『信用組合四十年』誌の中で、当時の梅野理事長は次のように語っている。

「(略) 疑いもなく組合創立以来かつて無かつた大事件続きでありましたが、関係各方面の指導と、ことに当時よく組織が固まつていた北海道市街地信用組合協会の協力も手伝つて、中央との連絡もよく、諸事順調に運びました。組合自体としては、出資金や積立金の大部分を切り捨てなければなら

ず、遺憾千万の始末にもなりまし

←古平信用組合四十年記念誌



古平信用金庫

たが、これはひとり私どものところだけではありませんでしたし、組合員皆様の不屈不撓の組合再建のご熱意のおかげで、直ちに新出資を得て再建出發ができたわけです

(古平信用金庫『皆様とともに四十年』より)

昭和二三年三月、まず再建整備を完了し、同年七月には美国町の要望にこたえて美国支所を開設し、積丹郡一円の地域に営業範囲を広げた。

また昭和二二年からは庶民金庫の代理事務を引き受け、古平郡・美国郡・積丹郡の引揚者や、戦災による疎開者などの人びとに生業資金の貸付けを行った。

＜続く＞

昭和三年 続く

▼九月二三日

五時半起床、農園行き、一巡してようやく五斤程拾う。終つて菊の花の蕾を取る、今秋はよい花が咲くだろう。秋植え球根を植える畑のうね上げをする。八時熊さんが来たので家へ帰る。お寺の鐘がゴーンゴーンと鳴る。今日は彼岸の中日だ。帰つて朝食後、平田さんのところへ行き、昨夜支払ひした祭礼の勘定金額を知らせ帰る。この頃から雨が降り出した。朝の便で幸治から葉書が来る、二二日午後から自由行動であつたので、平の叔母さんのところを訪問、いろいろ馳走になつたとのこと、学生時代の旅行は面白いものだが良かった。困愛子さん、不快でしばらく休学するとして帰っている。

▼九月二四日

起床五時半、本朝は割と暖かい。農園へ行き一巡して五斤程拾う。菊の手入れをしていたら雨が降り出した。板倉に入っていたが熊さんが来たので、家に帰つたら八時

であつた。雨はなかなか止まぬが、この頃では今日は暖かい。正治や四郎はまた裸になつてゐる。

▼九月二五日

起床五時半、去る一日以来毎日早起きだ。身体にはよい。昨日からの雨は引き続き降る。長ぐつ、防水外套で農園へ出かける。一巡して五斤程拾う。菊の蕾も大分大

この風が案じられる。

▼九月二六日

起床六時、今日もまた雨模様、長ぐつ、防水外套で農園行き。昨夜の暴風で落ちたろうと思つていたら、その割りに落ちていなかった。熊さん八時に来たので帰る。権平さんからスケソ縄二〇ペ、ヤメ三丸取りに来る。時々雨が降つ

高野孝作さんの日記から

当時の世相を見る

(137)

きくなつた。小菊も枝を張り蕾が沢山着いているので、一〇月末には見事に咲くだろう。熊さんが来たので八時半帰る。この頃から豪雨になり風も交え暴風雨になつたが、間もなく収まり晴れてきた。家では妻が忙しく、私もトミ、吉治が学校へ行つてゐる間は久の守り役だ。夜になり、また雨に風を交えて暴風雨になる。菊の蕾は如何

▼九月二七日

起床五時一〇分、熊さん早く来て板戸を開ける。私は農園行き。

一巡してカメナシを取つていたら買人が来た。熊さんも来る。明日は十五夜さんなので、カメナシ、リングなどが売れて行く。八時半帰る。妻は今日キノコ取りに行くとして、ワラジがけで出かけた。店は閑散。やがて雨もすつかりあがり快晴になつた。こんな時の山遊びは愉快ならん。妻は四時頃帰る。今日はバスケット、風呂敷にいっぱいの大当たり、キノコ取りも今がちょうどよい時だ。

▼九月二八日

起床五時半、熊さん農園行き。今日は命日なので、家で私が手伝いをする。勇丸が小樽へ行くので、カメナシを岡崎や幸治へ送つた。月末なので、午後から熊さんは集金に出かけた。今日は十五夜さんで、子供らはご馳走があるとして大喜び。オハギをこしらえる。せつかく待つていたのに今夜はどうとうお月さんが出なかつた。秩父宮殿下と松平勢津子姫のご婚儀は本日行われる。

▼九月二九日

起床五時半、昨夜からの雨、今

朝も降っている。農園へ行ったが最早おくてばかりになった。今日は割と落ちてない。菊の蕾もだんだん大きくなる。八時半帰る。時々大降りとなり風も吹く。秋らしい天気だ。

▼九月三〇日

起床五時四〇分、今朝は寒いこと、アラレでも降りそうな天気だ。また雨が降る。農園へ行き6号、49号の袋外しをやりながら番兵だ。熊さんは集金に出た。今日の寒いこと、袋外しをしている手や足が冷たい。桑名の山本製網の出張員が来る、しばらく話して正午の自動車で帰る。熊さんは午後から農園行き。一時頃から妻、トミ、吉治の三人がキノコ取りに行く。この頃キノコ取りに毎日百人以上も行つてるとのこと。中には荷車に積んで来る有様。

▼一〇月一日

起床五時、洗面早々出かけた。門を入ったらドンドンと太鼓の音が聞こえる、私は七番目で本堂のお経の終る頃であった。次回からは少し早く行かなければならぬ。

六時に終わり、和尚の部屋で話します。七時帰る。その後朝食をすませ、農園行き。例の通り一巡し、6号、7号の袋外しをやる。熊さんは板倉内片付け、その他の用事をしている。時々雨が降り悪い天気だ。一時頃熊さんが来たので交代。店はスケソ漁支度でポツポツ忙しい。

▼一〇月二日

起床六時、今日は晴れそうなので衛生掃除をやることにする。農園の当番は私がやることにし、熊さんは傘さんと掃除に当たる。六時半農園へ行ったが早カラスが来ている。例の通り一巡す。後、花畑のうね上げ、肥料をやる。なかなか忙しい。七時頃から快晴になる。着ているものをぬぎシャツ一枚でやる。浮世離れしたような農園で働くのもいいものだ。昼食は板倉の前にムシロを敷き、ヤカンの水を飲みながら食べたが山海の珍味よりおいしい。二食分もあった弁当をペロリと平らげ、自分ながらあきれる程だ。二時頃、学校から帰った吉治が来る。私は家へ帰ったが、熊さん、傘さん、コ

ノさんが家の掃除を一生懸命やっている。私は店の品物を倉から出して並べる。六時頃には全部終つてよかった。

▼一〇月三日

起床六時、農園行き。雨空だ。一巡したが1号、7号、49号は全部で三千斤ぐらひはありそうだ。左程落ちたのが無かった。今日は球根類のチューリップ、水仙、グラジオラス、ユリなどを植え付けする。時々雷がゴロゴロ鳴り、雨になつてきたので板倉に逃げ込み、晴れ間を見てはまたやる。一〇時頃熊さんが来て交代す。午後、妻は傘さんが札幌の病院から帰られたとのことで見舞いに行き、五時頃帰る。この頃は暑からず寒からず、一年中で一番気持ちのいい時だ。雨で衛生検査も一日に延びた。夜、七時頃から大雨が降り出し、雷鳴も激しく、夜中まで大雨が降り続く。

▼一〇月四日

起床六時、早速農園行き、番兵だ。一巡したら1号、7号で一〇斤程も落ちていた。菊の蕾がだん

だん大きくなった。花□（一字不明）の木（八重咲）は冬の雪にも折れなかった。今日は枝切りをして手入れをしてやろう。新枝も保存しよい枝に仕立てなければならぬ。七時頃、傘さんキノコ採りに行かないかと誘う。家へ帰り急ぎ支度をして八時出かける。暑からず寒からず、秋の今頃の気候は気持ちよい。ワラジがけの山遊びは愉快だ。ススキナイの方から家の松山へ行く。ずい分人が来ていると見え、草も倒れて通路が出来ている。大きくなってしまったものもあるが、それでも良いものが沢山あり、休むのも忘れて採り面白かった。ドッサリ採つて、山の中で食べるにぎり飯は何とも言えずおいしい。傘さんとはぐれたが、一時半下山、キノコがいっぱいの大漁、平さんが来るだろうと田で休んでいたが傘さんが来たが、私の半分ほどだった。二時半家に帰る、疲れたが面白かった。電灯会社では、前の道路の角に大電灯をつけたので夜は明るい。

▼一〇月五日

起床五時半、昨日キノコ採りに

行つて、沢山探つて面白かつたので平さんから電話があり、今日も行かないかと誘われ、早くからおにぎりなどの支度をする。七時半、平さんが来て、私は田から借りたキノコ籠を背負つて出かける。秋の空はきれいに澄み渡り、天高く馬肥ゆるの好季節、ワラジがけで農園を通つて行く。実に気持ちよい。途中はこの天気で小豆落とし、稲刈りやら水田こしらえなどで忙しい。はげに稲が沢山掛かつていて内地のようだ。今日はヨシヤチまで行くことにする。なかなか遠いが別に大儀でもない。川を渡つて松山に入る、かなりある。こうしてキノコを採っていると何もかも忘れ面白い。松山の中でキノコを採つて土だらけの手でぎり飯を食べたが、そのおいしいこと。籠に七分どおりも採つた後、

○さんの山へ行つたら、良いのがあるわあるわ実に見事。これなら始めからここへ来るのだった。一時半頃、籠がいっぱいになつて下山す。天気は良いし道路をブラブラ歩き、三時半頃家に帰る。皆大漁だと喜ぶ。

▼一〇月六日

起床五時半、農園行き。高丈をはいて手籠を持ち、朝露をふんで畑を歩けば足や手が冷たい。暑い暑いと言つていたが、早冬も近く、コタツが恋しくなるのだ。一巡した後、菊の手入れをする。八時半頃熊さんと交代する。太陽が出てからは少し暖かくなった、秋空は高く心地よい天気になった。正治が三時頃、四郎や外の子供たちと遊んでいてやぶ長裏の水ために落ちたとて、腰から下ドブ水だらけで抱かれて来た。子供時代は油断がならぬ。それでも小さい難でよかった。国許[㊤]から生栗が小包で送られて来た。

▼一〇月七日

起床五時半、顔を洗い火をたきつけていたら、熊さんが来て板戸を開ける。私は早速農園行き。今日は昨日より幾分暖かく、足も冷たくない。一巡したが6号、7号が色づく。菊の蕾も大きくなり葉も元気よい。二十日頃にはよい花を見るにやろうと、花を手折つたり、リングの苗木の枝切りなど

する。九時、熊さんが来たので帰る。今日は今上陛下・皇后陛下のお写真奉戴式があるので、一〇時学校へ行く。門前に整列、余市から自動車でお持ちする。学生、青年団、婦人会から一般の人までが出迎え、学校前から仲通りまでいっぱいの人、一〇時半から式が始まり、後、一般にうやうやしく拝観させる。一二時帰る。介主人の全快祝いのモチを持つて姉さんが家へ来られる。若い衆も来てほかへも運んでいる。幸治からはがきが来る、一〇日から一二日まで、庁商バザーを公会堂でやるので今準備中とのこと。小樽へ行きたいと思つているのだが、都合で一〇日に行くかもしれない。夜七時頃、ダイマルが来てミサホさんが悪いとのことで行つたが、七時半亡くなった。まだ二〇歳だといふのにかわいそうである。

▼一〇月八日

ダイマルの娘が亡くなり、私も熊さんも手伝いに行く。今日は雨が降る。私は香典書きをやる。この日、五時頃から大雨になり、通夜に来る人もこの雨では困るだらう。

う。一一時頃から暴風雨になったが、暖かいこと夏のような夜であつた。一二時帰り休む。

▼一〇月九日

起床六時、今日はダイマルの葬儀だ。私も八時半に行く。香典帖、その他記帳で忙しい。一一時出棺、幸い好天となつた。三時半骨拾いに行く。五時から忌中引き、読経がある。六時から食事あり、後、忌中御礼のはがきを書く。香典調べなどして帰つたのは九時、熊さんも帰る。今日午前八時頃までは雨、畑は午前中天野さんが番兵に行き、午後からは吉治が行く。夜一〇時休む。

▼一〇月一〇日

起床六時、ダイマルの葬式も昨日で終わつたが、後片付けと骨納めなので熊さんは手伝い。畑の番はコノさんに頼む。私は観音滝参拝のピラを五枚程書き、帰つて大へ行く。後、新地町[㊦]で二歳の子供が死亡したとこのことで葬式に行く。今日は時々小雨が降つたが暖かい日だ。一時頃、太の骨納めに行く。後、お寺でラジオを聞く。

秋植え球根についての講演があり、チューリップ、ゆり、水仙の植え方などにつき話していたが、いろいろと参考になる。三時帰る。熊さんは裏の菊の花壇に囲いをこしらえる。四時頃農園行き、菊の蕾がだんだん大きくなる。明朝六時の自動車で小樽へ行くことにし、それぞれ支度す。

▼一〇月一日〜一三日まで欠

▼一〇月二四日

吉治らの下宿に泊まった。私は六時半起きた。今日は八時一五分の汽船で帰るので支度す。秋晴れの好天気、日曜日なので小樽駅からは、余市リンゴ畑見物の人なども沢山乗る。余市駅に九時に着き、馬車でモイレまで行き富丸に乗り込む。九時半出発す。珍しい上ナギ、楽に眠って来られた。自動車より七〇銭も安く、そして楽だ、この方がよかった。一〇時半着く。中央通のアカシヤの苗木、かなり植えられた。春から夏には青葉が出て見事ならん。困や支店へ行き、小樽からの言づてを伝える。午後四時頃農園へ行ったが、灌漑溝分岐線もかなり出来ている。五時帰

る。夜、ダイマルへ行く。聞けば今朝秋イカがとれ、一人当たり一〇〇から五〇〇ぐらい、町売りが一〇銭に三ばい。

▼一〇月二五日

今日は祝聖会の例会日、四時二〇分起床、まだ真つ暗、前回はつい分遅れたので早く支度して出かけた。お寺に着いたらお経が始まっていたが私が一番であつた。五時半終わり、和尚の部屋で話す。

一七日の観音滝観楓会のことや、二二日頃、湯内山中の新道が紅葉して大変よい所であるから、観楓会をやるなどの相談がある。七時帰る。コノさん畑の番で、熊さんは家の前に植える記念樹のアカシヤを掘り取るべく、困のハイカラ山へ行く、三本持つて来て、午後から私も手伝つて植えた。中央通りは見渡す限り西側に記念としてアカシヤを植えたので見事、これが若葉が出たら風景もよろしいだろう。今日は割りと暖かく、そしてよい天気だ。

▼一〇月二六日

起床六時、今日は暖かい、そし

て良い天気だ。熊さんは天野さんと裏のコヤシかつぎをやる。道路がよくなったので仕事もはかどる。昨晚もイカ五〇から六〇あり、二〇〇ぐらいとった人もいるとか。イカ道具がポツポツ売れ行く。私は店番のかたわら倉庫内で9号、49号などの虫食いをより分ける。本年は全部で囲い一五〇〇から一六〇〇斤程のようだ。

▼一〇月二七日

起床六時半、今日は観音滝参拝観楓会の日だ。快晴で暖かい。四年前に入仏式をやったが、その日はミソレ交じりのずい分寒い日であつた。近年は暖かく、今日などは小春日和だ。勇丸が九時頃小樽へ行くというので、岡崎へ大根、ネギ、幸治へリンゴ、ネギ、下宿へ大根などを送るので、熊さんと支度に忙しい。九時、観音滝へ出かける。服にワラジ掛け、今日は自転車に乗らず、途中、秋の野山の景色を眺めながら行く。一一時半、観音滝に着く。周囲の風景はよろしい、春の花時より秋の眺めは気持ちよい。正午、観音経を上げた後、マグロにいろいろな野菜

を入れた鍋の馳走で昼食をとる。二時頃帰途につき、途中、松井の畑、困のハイカラ山、④公園に寄り、五時頃帰る。

▼一〇月二八日

起床五時半、この頃では早起き、まだ暗い。洗面していたら熊さんが来る。久し振りで農園行き。朝の風の冷たいこと、霜が降りて白くなっている。畑へ行き、高丈をはいてはおかむりして見回る。露にぬれた足は高丈をはいていても冷たいこと。ようやく我慢しながら回ったが、一〇日程も来ない内にずい分と寒く、今日などは初冬のような気候だ。菊の手入れをしたが蕾は大きくふくらんだ。いろいろと花を手折っていたら、傘さんと熊さんが来たので家に帰った。天気も良くなってきたので、今日はリンゴを全部もぐとのこと。店はイカがつくので、道具の客でポツポツ忙しい。妻は今日お寺の観音講があるので、正治、久を連れてお寺参りし三時頃帰る。裏の菊も蕾がだんだんふくらむ。明日は学校の遠足だとして、子供らは支度している。クリゴ飯の馳走をする

というので、夜、一同でクリの皮むきをやる。今日農園のリングゴを全部もぎ倉へ入れる。奥の座敷にコタツをかけた。

▼一〇月一九日

起床七時、今日は仏さんの命日で、妻は早くから起きて忙しい。リングゴ昨日全部もいで倉に入れたので、今日からは安心して居られる。畑も今までのようにカラスを心配して、夜が開けると直ぐに行かなくてもよい。午前中、倉の中のリングゴ囲いの準備などをする。午後三時農園行き、菊の蕾がふくらんで、このまま畑に置くのは惜しいので掘り起こし、熊さんに担いでもらって家の花壇に植えたら賑やかになった。夜、土谷主人が亡くなったので通夜に行く。帰りダイマルに寄り話し、後、**困**へ寄ったら佐渡エビスで昨夜大火があり、八百戸余りが焼失したとのこと。驚いた。実に気の毒なことだ。

▼一〇月二十日

起床六時半、朝食後、久をだっこして**困**裏のトリやら、浜辺を散歩す。だっこしているといろいろ

なものをを見ていておとなしい。熊さんは大根抜きをやるので天野さんと畑へ行く。よい天気だ。帰って来ての話では、昨日板倉に入れておいた49号が少々だが無くなっていると言う。急いで担いで来て家の倉に入れることにした。実に悪いことをするものだ、要心すべきだ。私は家でリングゴの置き場所をこしらえたり忙しい。正午までには全部倉に入れた。午後から妻も農園行き、丸大根を二〇〇程も抜き、熊さんと天野さんがそれを洗って干す。聞けば佐渡エビスの火事で、**困**では倉に胴鉢千何百箱も入れていたが倉が焼失、保険を掛けていなかったため一万円余りの損害を受けたとのこと、実に気の毒なことだ。

▼一〇月二二日

起床六時、よい天気。例年新嘗祭ころにはアラレが降ったりするが、本年は割合暖かく今日などは小春日和だ。今日は日曜なので信用組合の観楓会(泥の木)があり、四〇人程が参加する、それに大謀連、警察などがハイカラ山で観楓会を催すとドンドン繰り込む。

不況などと言っても世の中はだんだん開けて、こうした行事がハヤルようになったのだ。妻は大根買いが来たので農園畑へ行く。夜、ダイマルへ遊びに行きいろいろ話し、一〇時帰る。

▼一〇月二三日

正治が朝からセキこんで風邪のようだったが、夜中の二時頃から、セキとともにのどがゼーゼーするので、一刻も早く妻と二人で蓮実さんへ連れて行き、注射をしてもらって帰る。まずひと安心した。朝までにはだんだん良くなったように、朝になると起きて元氣よく遊んでいる。これで安心した。秋晴れの快晴の天気となり、熊さんと天野さんは農園で大根抜きや、リングゴの木を切る。この頃の気候は畑にいても気持ちのよい時だ。大根不作のため、今日もあちこちから売ってくれと来る。長大根五〇本、丸大根六〇本(一円)に売って売っている。

▼一〇月二四日

起床六時、今日は学校の遠足なので子供らは大喜び、六時頃から

起きて支度に忙しい。前の晩にこしらえたマンジュウ、オヤキ、それにリングゴなどを持参した。秋晴れに恵まれた遠足にはよい日だ。子供時代にはこうして行くのは楽しいものだ。余市沢町小学校生徒百余名も、陸路、古平へ遠足に来た。学校で休み、二時頃日帰りする。ラッパ隊六名もおり、勇ましく行進曲をやって行く。

▼一〇月二四日

起床六時、農園行き。今日も幸い好天気、秋菊は元氣よく蕾もだんだんふくらむ。熊さんと天野さんは大根抜きやらリングゴの木を切る。あちこちから大根買いが来るので妻も午後から農園行き長大根五〇、丸大根六〇で売る。前に悦三の看護をしてくれた看護婦さんから手紙が来る。当時のことが思い出される。

(続く)



町内の学校探訪

11

古平小学校

◇二階建て校舎落成式

児童・生徒が急増したため再度の二部授業を余儀なくされ、増築校舎の竣工が待たれていたが、明治四十二年一月三日、木造二階建ての校舎が高台にその威容を現した。(写真次ページ)

校舎の敷地は六四五八平方メートルを買収し、外に町有地三五・一八平方メートルを私有地と交換し、九九七六平方メートルとした。

校舎二階建て 五二七平方メートル
屋内運動場 三九七

玄関・渡り廊下・雨具置き場・小使室・湯沸場 三四二

男女便所 六六

合計 一、三三三平方メートル

工事費 一四、七三三円六七九厘

一〇月三〇日の落成式には、小樽支庁長山口駒吉外多数の来賓が参列し行われた。来賓には記念品を贈り、児童や町内の各家庭には紅白の餅を贈って校舎の落成を祝った。

増築校舎の落成を記念し、町民からは次のような備品類が寄贈になった。

教育用電話機 一組 二五円

消火器 一組

日本名勝絵はがき

教育用無線電信機 一組 二〇円

作法教授用具 一揃 一五円

教育用無線電信機 一組 二〇円

テーブル 一脚 一五円
電車模型 一組 五〇円

メトロノーム 一個

式壇覆い 一枚 一〇円

角盆 二枚 七円

動物・植物・鉱物・岩石・漆器・陶器・織物標本 一〇〇円

時報鐘 一個

百科大事典 一揃

ミシン 一台 六八円

テーブル掛 一枚 九円

顕微鏡 一台 五〇円

油絵額 一面

参考用図書 九四冊

石膏細工 一個

電話機 一台 四〇円

幕 一張

バイオリン 一丁 二四円

時計 一個 一五円

理化学器械 三點 一〇円

大鏡 一面

古平教育会主催の教育品展覧会は、新校舎で三一日から三日間開催した。古平尋常高等小学校的の児童作品の外、府県から一七六点、道内一、五二一点、町内の各校から一五八点の成績品を展示した。

古平尋常高等小学校的の新築校舎は、継続事業として次のように北海

海道庁の許可を得て実施したものである。

明治四一年度～明治四二年度

古平町臨時部教育費継続年支方法

金一万七千百参拾八円四銭

教育費総額

金一万式千九拾七円四銭

明治四十一年度支出額

金五千四拾貳円

明治四十二年度支出額

◇学芸会

学芸会は何時頃から、またどのような形で行われたかは明らかではないが、日常的な学習の一環として、小規模の発表会のような形で行われていたようである。明治四三年には新地分教場で、修身のお話、唱歌、簡単な遊戯などの発表会、後の学芸会のようなことが行われていたという談話がある。

学芸会は、教科書による内容であったが唱歌はなく、舞台装置なども無かった。朗読や理科の実験などが行われ、児童は袴をつけた服装で舞台に立っていた。

大正九年二月一日、本校で行われた学芸会の感想を、梅野清太

郎は「吉田智恵子の朗読 吉能政治の花咲翁は全校の白眉たり」と記しているところから考えると、演劇のようなものも行われていたものと思われる。

◇教員の疾病治療

明治四二年一月、学校職員が職務のため病氣などにかかったときは、療養費を支給することとした。

支給については、診断書を提出し要件が定められているが、第一条として、本町立小学校校長または教員、代用教員にして、職務のため傷疾を受け、もしくは疾病に罹り、医療を受けたる者には療治費を支給す

(以下省略)

◇新地分教場の廃止案

明治四四年一月の町会に、古平尋常高等小学校新地分教場を廃止か閉校についての諮問案が提出された。

当時の新地分教場は一般住宅に隣接し、児童数は一五〇人を超えていたが増築の余裕もなく、本校の増築によって合併しようという案であった。

町会で審議され次のような答申

により見合わせるようになった。

答申書

明治四十四年一月二十三日提出の諮問案、古平尋常高等小学校新地分教場廃閉の可否に關し、古平町会において審議を重ねたる處、時期尚早に付き、従来の如く存立し置くものと決定せり、右一級町村制第六十条第四項より答申候也

明治四十四年二月一日

古平町会議長

古平町長 岩淵三樹藏 印

古平町長

岩淵三樹藏殿

※ 当時、古平町議会は古平町会という名称で、町長が町会を招集し議長を勤めていた。

◇学事視察と奉安殿

明治四十三年六月、道庁から視学山崎恒一が来町して学事視察を行い、一月には初代後志支庁長となつた東郷重清が始めて町政や学事の視察を行った。

※ 現在の後志支庁は、それまでの寿都・岩内・小樽の三支庁が合併して、明治四三年(一九一〇)後志支庁となつたもので、全道で新たに一四支庁となる。それまで

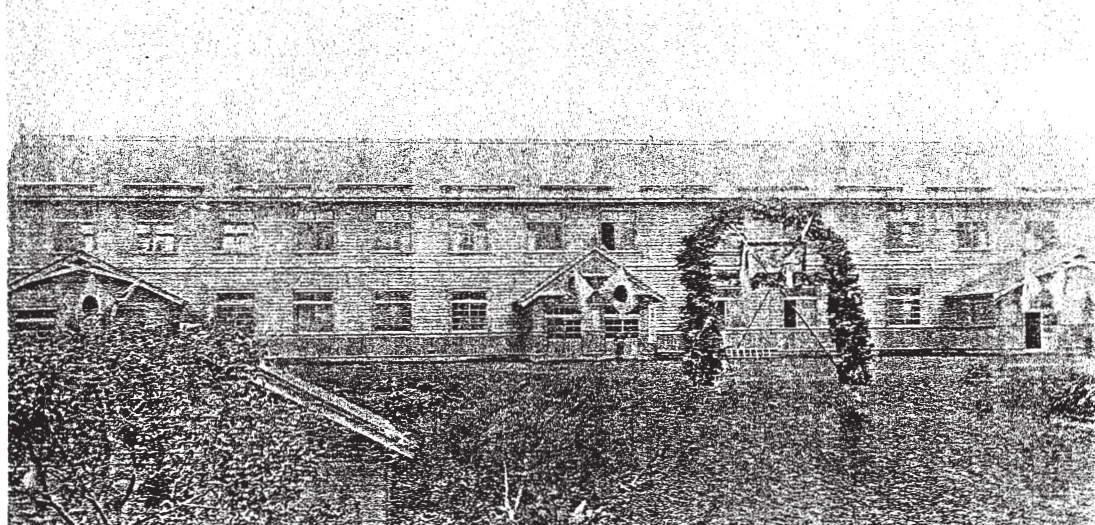
古平町は小樽支庁管轄であつた。来年四月からは一四支庁が一世紀を経て再編されることになる。

明治四四年一〇月

御真影(天皇・皇后陛下のお写真)奉置所を改築しなければならなくなり、浜町恵比須神社横から学校裏の杉木立付近に改築した。この工事費金一六八円四三銭は新地町で呉服商を営む佐野呉市が全額を寄付し、一二月に竣工した。この年、夏に水害があり、御真影奉置所の改築費予算は災害復旧費に当てられた。

八月、皇太子殿下の本道行啓記念事業として、校庭の整備と植樹が行われることになつた。

(続く)



→ 竣工式を迎える木造二階建ての新校舎
現在の文化会館敷地に建つていて一部が改築されたが、小学校が解体されるまで五〇年を超えて思い出が詰まっている。

II 膳箸(いちせんばし)の船印

岡田家の繁栄と 北前船と古平

商

場(あきないば)として、松前藩が直接経営したり、上級の家臣に蝦夷地の一定の地域を貸し与えて、アイヌの人達との交易(物々交換)をさせていた。このような場所は、または交易場所、支配所、蝦夷商場所とか、単に場所とも言われていて、ここで交易の権利を持つ家臣は支配所持とか、場所持などと言われていた。

そして、特に利益の上がるような地域は藩主が所有し、家臣の交易にはいろいろと制約されることが多かった。

海

を相手の漁業者や海運業者らは信仰が厚く、岡田家では呉服太物商いのほか漁業や海運業を営んでいたせいか、神

社仏閣への寄進が多かった。

各地の請負場所でももちろんだが、出身地である近江八幡市の比牟礼にある巨石を積んだ石垣は、貞享二年(一六八五)、松前組の寄進と言われ、正徳二年(一七二二)五基、享保三年(一七二八)三基寄進した御影石の常夜灯籠は、裏参道の右側に並んでいる二基と、左側に離れている二基には「松前組」「正徳二年壬申霜月吉日」と刻まれている。

また、明和八年(一七七二)、神社に御神輿を寄進することになり、その時の奉加依頼の記録も残されている。

近江八幡市にある岡田家の菩提寺でもある八幡西別院の表門は、明和四年(一七六七)十一月

に建造寄進されたと伝えられ、明治維新の頃までは同寺の諸費用の半額は岡田家で負担していたと言え伝えられている。

古平町港町厳島神社は宝暦元年(一七五二)の創建であるが、石灯籠二基のほかにも、弘化二年(一八四五)、古平運上家寄進の御影石の鳥居がある。

岡田家の本店は、近江八幡為心町元西側角地にあり、豊臣秀次が八幡山に築城の際、その余った木材を用いたとも言われ、現在その大黒柱を秀次柱と言っている。

裏手に土蔵五棟が現存し、小堀遠州好みの日本庭園と茶室一棟が残っている。近江八幡は寛永九年(一六三二)から寛永十九年(一六四二)まで小堀遠江守の支配であった。

松前の出店は、大松前町の東西両側に広大な店舗を構え、羽振りを利かせており、松前の祭礼の折には東の山車は弁天丸と称して岡田家で奉仕し、漆塗りに金色がさん然と輝き、刺繍した幕を引き回し、恵比須・大黒の人形を載せていたが、その費用は岡田・藤野両家ですべて負担してい

たという。

岡田家では寛保の頃(一七四二)、松前の画人として名を知られた竜田斎児玉貞良に、松前屏風を描かせて所蔵していた。この屏風は外にもある田付家の松前屏風より以前に描かれたと考えられており、道史編さん委員の永田富智は「新しい道史」の中で次のように書いている。

「…江差屏風と一対になっているもので、松前の生んだ風俗画家人玉竜田斎貞良の作である。江差の春に対して松前城下の秋が描かれている。白を中心として背面の堂伽藍、前部の船の往来、人の動き等見る如く、最前に聳える峨々たる岩木山で、正面沖口役所前に蝦夷の丸太小屋があり、左端には弁天、博口石が見えている。右端には及部の仮小屋があらうて雁が群れており、城下の秋を一望に蒐めている。」

寛

政二年(一七九〇)から、場所請負人は松前の住人に限られたので、恵比須屋治助が支配人名義で請負人となった。

古平運上屋はいづ建築したかは明らかではないが、安政元年(一

八五四)岡田半兵衛が場所請負人のとき、運上屋(建坪二五二坪)と小家九四軒が建つていて、船は二七二艘あり、運上屋の役付きアイヌ二名で、ニシン、アワビ、イリコ、サケ、カスベ、タラ、ヒラメなどの生産高は三、六五九石であつた。

古平運上屋岡田八十治正期(二一代)の安政五年(一八五八)家業要記に、

フルヒラ 新井田喜内領

寛政六寅年十月請負証

来卯年子年まで十一年間

小判二千両(契約金)

享和元年 夷(アイヌ)数二百

七十二人

寛政十一年契約切り替え

申年子巳年まで十ヶ年間

二百八十両

安政五年運上屋改築並びに道路の改修

とあり、寛政六年(一七九四)一〇月文化六年(一八〇九)まで新井田喜内と契約している。

藩

土(知行主)が、自分の場所ですで許されている権利は制限されていて、古平場所はアイヌと交易を許されているだけで

あつた。漁業は藩主の特権であつて、許可が無い限りは知行主でも勝手に漁業を営むことはできなかった。従つて場所を持つ藩士は、夏場の海の静かな時期に自分の場所に行き、アイヌと交易(物々交換)をした品物を持って松前城下に帰り、それを商人と取引して利益を上げていた。これを夏商場(なつあきないば)と言つていた。

だが、このような商売に慣れていない武士にはこうした状態が長く続かず、場所は商人の手に移るようになった。これは自分の場所での権利を商人に譲つて、運上金といわれるその契約金や、利益の分け前をもらつて、城下で安心して暮らしていた方がよいからである。

しかし、藩士の知行所に行くのは制限があり、毎年、一場所夏船(なつぶね)一隻と定められていた。その後、サケ、マス、ナマコなどの新しく漁業を起したというところで、知行主から藩主に申し出て、これに対しての更に運上金を藩主に納めて、船を増やして場所での交易が出来るようになった。これらの商人を請負人、その料

金を運上金、交易する所を「えぞ介抱所」と言われていたが、後にはその規模も大きくなり、「運上屋」と言われるようになった。「運上家」という表記もある。

松

前藩からは、岡田家は特別優遇されていたようである。文政八年(一八二五)、「松前沖の口御番所取扱い並びに御收納取立て方手続書」によると、内地から積んできた荷物は、沖の口番所へ届出て船改めを受け、松前の相場ではなく仕入値段で、百文に付き二文の口銭を納めなければならなかったが、近江商人である恵比須屋岡田家、他八人については次のような取り扱いであつた。

「近江店については、上方筋からの下り荷物のある時は、時の相場にかかわらず木綿、小間物は一個につき代銀一貫匁、荒物類は一個につき代銀五百匁と定めているので、それを以て口銭を取り立てること。」

ただし、この近江店というのは昔から当地に来ていて漁業、商いなどをしていて、これを見習い松

前市中も追々開けて来た。その他、松前家に対し格別用立て(金銭など)もしている。松前領で商売していた店は三十軒余りもあつたが、現在商売しているのは、大松前町恵比須屋源兵衛らで九人である。」

※ 沖口番所(おきのくちばんし) 沖口役所とも言われていて、港の取締りと船の出入国、交易船の課税などを管理する松前藩の役所。松前藩では米は全くとれないので、蝦夷地で産する品物を他国に売る商取引が藩の収入源であつた。そのため寛永七年(一六三〇)から福山(松前)・江差・箱館(函館)の三港に沖の口番所を設置して開港場とした。一時、幕府の直轄地となつたが、その後、領地がもとに戻つた文政四年(一八二二)から沖口役所と改称した。松前沖口役所は沖口奉行が管轄し、江差は檜山(ひのきやま)奉行、箱館は亀田奉行が兼務した。この沖口役所の設置は、交易などの物資の流通を独占して藩が支配するためのものであり、これと場所請負制度は藩の財政の柱であつた。

夏を暑くなくして

大 澤 文 子

「わたしはネエ、新潟生れの新潟育ちよ……」 ある会合の休み時に私はこともなげに言った。

「ああら、そう、道理で時どき内地弁が出るわねえ」と友人のひとりか言った。

あーそうかなア、あの頃はまだ幼かったので言葉のことはわからなかったのに……と思った。その後、父の転勤で一家は札幌市の南大通り西十九丁目に転居した。姉と私は札幌師範学校付属小学校の五年生と三年生になった。今でも特に新潟弁なんて分らない。

まあいいつか、気にすることもないが……と、自分をひととき納得させる。

それよりつい先日、テレビで報じられたが、札幌市のある地区で業者が手違いで水道水が一時止まって大変なことになったと言う。

私は心配性……他地区なのに大急ぎでバケツに使い水、白いタンクに飲料水をと、それぞれ水道栓をひねりホツとする。

その日は玄関前の打ち水もとり止めとした。他地区の水道栓の一時の恢復を祈りつつふと思った。

それは姉のことだった。

姉は生前、九州のある大学でながい間数学の教師をしていたが、その頃、猛暑の日々が多く水飢饉が多く大変なの！ つらいといつも言っていた。身弱な身体に鞭打ち薬缶一つを持ち、何日も街はずれまで水を汲みに行かなければならなかったと言う。

それはそれは大変なの……と、実に電話で悩みを訴えていた身弱な姉を今でも想い出すと悲しい。本州方面では特に猛暑は毎年続き、ひととき水飢饉におそわれること

もあつたと言う。

当局ではやつと『水を大切に！』キャッツフレーズもとに『昭和五十二年八月一日』を『水の日』と決めたと言う。本州方面の人々の喜びの笑顔を忘れることは出来ない……と共に、水道の蛇口をひねっているであろう姉の、喜びの声と笑顔が忘れられない。

「水の日」を決めホツとしたその頃の水道局が出した面白い記事を姉がまた送ってくれた。

「さてあなたは『水ことば』をいくつ知っていますか。親子水入らずでチャレンジしてください……」というような文面だった。会合などの時、チャレンジしてみると面白いのではないかと思ったが……。また今年は特に早く札幌でも猛暑が続き、常に体温の低い私にはつらい日々が続いた。

先日、病院で身体内の『密度』を診査するのことで大変だった。まあ世の中すべて『七十五歳以上の老人は……』という時代になったので、びくびくして病院の診査を受けたが「まあまあだねエ、だ

が歩くことに専念したほうがいいよ……」と、書類のある部分に印をつけ、印をつけた部分を指し医師はほほえまれた。

仕事をもっていた若い頃には、毎日走り回っていたのになア……

ここ二、三年はなんとなくこもる日々が多くなったと実感！ 病院からの書類の、囲まれた『歩く』の文字をながめ「うーん、よし！」と納得する。

流行の波に乗るひつようもなく歩き易い短かめの衣服を……と洋ダンスをあけてみた。

ふと、夏本番になると、いつも歌友から注意されることどもとやさしさを思った。

「この暑い本番に帽子もかぶらず日傘もささず、日射病に注意しなさいよ！」……と、強くやさしく毎年注意される言葉だが……。頭のにせるものはすべて煩わしい。でも今年は帽子をかぶって歩き廻ろうか、

女心なんていぢらしいもの……、医師からの一言を守って……と日記にするす。

柔道

世界選手権で二連覇

町出身の須貝等選手

間もなく迎える北京五輪、柔道へかけるメダルへの期待は熱烈なものがあります。須貝等選手は中学時代から、すでにその頭角を現していました。

数々の輝かしい戦績から、高校柔道界の強豪である東海第四高に

道産子 古平出身 須貝

女子72キロ級で



世界柔道選手権の95・0級決勝で、メイヤーを激しく攻めて優勝した



優良乳幼児表彰式

→オランダ・メイヤーとの決勝戦を一分一〇秒で制する
↓金メダルを胸に、ふるさと古平へ錦を飾る須貝等選手
↑昭和四十二年度乳幼児検診・健康優良児第一位で表彰



「金」メダルを手にして喜ぶ須貝等選手

胸にキラリ金の誇り

世界柔道
「今度はソウル目指す」
西ドイツ・エッセンで開催された世界柔道選手権大会で、日本代表の須貝等選手が、女子72キロ級の決勝で、オランダのメイヤー選手を破り、金メダルを獲得した。須貝等選手は、この金メダルを胸に、ふるさと古平へ錦を飾る。須貝等選手は、昭和四十二年度乳幼児検診・健康優良児第一位で表彰された。須貝等選手は、この金メダルを胸に、ふるさと古平へ錦を飾る。

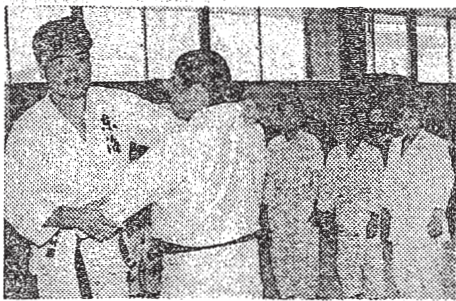
進学し、いつそう柔道に磨きをかけていたが、早くもその才能を現す時が来ました。高校二年のとき、全道高校柔道選手権大会の団体戦に先鋒として出場、立ち向かう相手を次々と一本勝ちで倒し、相手校の大將と対戦し、ついに一人で相手校の五人全員を倒し、団体戦での勝利を挙げたのでした。インタビューを受けた時の彼の言葉。「このまま俺一人で勝ってしまっているのかなあ、一人ぐらい残しておくか。」

そんなことを考えながら、最後の一人と闘ったそうです。この記録は大会初の快挙として大きく報道されました。注目の逸材として東海大へと進みましたが、大学時代の活躍もさることながら、卒業後新日鉄に入社、世界選手権大会に出場のチャンスが訪れました。昭和六〇年、ソウルでの世界選手権大会九五キロ級で優勝、翌年、ドイツでの同じ大会でも優勝、二連覇という偉業を成し遂げたのです。

柔道の古平中が復活

6年ぶり団体戦制覇

→古中柔道部を指導



→古中柔道部を指導
復興以来、団体戦では元古平中が六年ぶりの優勝を飾った。今大会には管内十七校、女子十八人を合わせて約二百人が団体戦、個人戦で参加した。これは次の通り

海を渡ってきた手紙

◆◆◆◆◆

流したビンの手紙が縁々 丹後さんに礼状どうさり

今月初め頃の道新に、様似町では近頃外国製品の漂流物が海岸に多く流れ着くので、それらを公民館に展示して、町民に公開しているという記事が出ていました。

その記事を見て、大分前のことですが古平に流れ着いた手紙が縁々、それを拾った漁師の人と、その手紙を流した、九州の或る中学生との交流が新聞に出ていたことを思い出しました。当時、話題になったそうですが、改めて紹介します。

これは昭和六一年一〇月のことです。浜町の丹後克義さんが、サケの定置網に偶然掛かっていたビンを見つけて、紙切れが入っているのを見たと、それは手紙でした。

書いたのは九州の或る中学校の一年五組の生徒だったのです。丹後さんは手紙を見て、早速その返事を書いて出しました。

福岡県粕屋郡志免東中学校では、担任の辻田先生が、対馬海流の調

査と同時に、クラスづくりや生徒に感動する体験を——と、七月に彦岐の海上から、クラス全員が百五本のビンに手紙を入れ流したものでした。「今まで京都や青森など八カ所から便りが届きましたが、北海道へまで流れ着くとは、みんな驚いています。」と辻田先生。

そして丹後さんへは、クラス全員からなんと四一通もの手紙が届き、その内容も「今までで一番こんなうれいことはない」、また「新聞にまで載るなんて、ビックリした」と喜びを書くものから、北海道の憧れをつづり、さらに自分の趣味や、好きな教科、似顔絵などで自己紹介する手紙もありました。

大勢の友人からの手紙を前にした丹後さんは、「この機会に古平の学校との交流が始まれば、言うことない」と、今後の成り行きに期待しているそうです。

（昭和六一年一月九日、道新に掲載されたものを参考にしました）

編集雑記

▽長期予報では（平年並みの気温）という今年の夏は、古平では六月中旬からは曇天で、時によっては肌寒い夏の始まりでした。本州は連日カンカン日照りの真夏日、道内も地域によつてはへたばるような暑さのところもあつたようですが、古平はまさに避暑地並みの過ごし易さでした。暦での『大暑』というのも、この天気では少しかけ離れたような感じでした。そのうちに『立秋』となり、「もう秋？」と思っていたのもつかの間、暦には『処暑』とあり、どうやら暑さもやむという意味ですが、北海道ではそろそろ冬の準備？そんな季節になってきました。

▽古平町開町百周年（昭和四三年）以後の年表を書き加えています。が、そんなに昔でもないのに記憶から薄れて行くものがあります。当時、生活の中で話題になったようなことを取り上げて、紙上でご紹介していきたいと考えております。

今回はたまたまオリピックが大きな話題になっておりますので、「かつては古平にもオリンピック候補選手が……」ということで、多くの

にも記憶に新しい須貝等選手、また心温まる話題として丹後克義さんのことを取り上げてみました。往時を思い出してください。

▽毎年、町の文化祭に昔の写真を展示しておりますが、今回（元氣ブラザー）のロビーでも、『古平のスケソ漁』のうち一〇点を再度展示することになりました。（担当福祉課）
▽すでにご案内のとおり、九月十日は古平町の敬老会が行われますが、『古平町のいまとむかし』という構想で、写真アルバムを作成して配付する予定です。昔のことを思い出すきっかけともなり、お互いの昔ばなしにさらに花が咲けば……とも願っております。

以前「せたかむい」紙上に「札幌通信」として、三年にわたって戦前戦後の体験、そして終戦でふるさと・古平に帰り、荒廃した戦後の青年活動での体験など、多くの読者を得ていた吉川義雄さんが、去る七月一九日札幌でお亡くなりになられました。一月から入院されての闘病生活だったようですが、生前のご尽力に感謝し、謹んで哀悼の誠を捧げます。



雜詠 〔七月号〕
主宰 水見壽男

古平俳句会

朝東風と若潮競ふ日本海 越野清治

如月の波音乾きつつ寄する

大ききの揃はぬ風情柳の芽

梅苔む膨よかなりし浅草寺

夕雲雀ふと溪谷の音も聴く

船かしぐ右に左に若布刈竿 山口悦子

薄氷を割るや飛び散る日の光

傘持たぬ肩にやさしき春の雨

ものの芽の生きとし生くる力かな

海峡の海道揺する大氷塊 越野敏雄

海猫むれて鯨来たる夢を追ふ

沖の海猫ブイにゆられて鯨待つ

木の芽吹く天を指したる粒揃へ

山の端を豊に走る春の水 高橋重子

静かなる山裾の宿春の雷

ふり向けど人影もなく春の雷

木目込の雛晴れやかにあでやかに

渡り漁夫岬に立ちて風を読む

早春の潮の香りがやはらかに

卒業の子供の肩に別れ雪

月光に影を残して鳥帰る

遠山を占むる霞の濃かりけり

潮流につばさを広げゆく燕

春風の潮満つ沖の波高し

径すがら春を咲かせる二輪草

遠嶺の色塗りかへて風は春

春の空まだ雲の色整はず

花の雨微かに闇の揺れにけり

吹かれても落花は風を選びけり

春潮の夕日に溶けてをりにけり

岬の波早や春光に馴染みをり

岬の波はやくも春光捉へたる

春光に溺れてをりし岬の波

花辛夷潮の香に揺れ風に揺れ

外山俊久

堀典子

【句評】

渡辺嘉之

室谷弘子



【三六】

— 七月号 —

吉平俳句会

山宿の目覚めもあらず夏霞 越野清治

遠山の墨絵のごとき夏霞

つゝ咲く姉も退院間近なり 山口悦子

水際の動めく見るや蛙の子

鳥賊干して足はからだの飾りかな 越野敏雄

朝鳥賊のうごめきをりし俎に

春雪を見せたくハワイより帰郷 大和田絵伊

草萌えて奥の細道歩きたし

鯉のぼり群れて踊し日本海 高橋重子

柔らかき風に踊りあやめ草

風もなく部落総出の野焼かな 外山俊久

爽やかな五月の香り通り抜け

ゆるやかに若葉幾万山揺るる 堀典子

崖海に若葉の色のどつと入る

晩学は俳句と決めて夏に入る 渡辺嘉之

浮玉のガラスを透かし夏来る

新緑の彩をつひばむ鳴かな 室谷弘子

新緑の湾へ傾ぎし影ゆるる

風どころ芽吹き遅らす積丹路 仲谷比呂古

沖合ひの虹の大橋風渡る

短歌

古平町岬短歌会

川やなぎ咲きて輝く土手いちめん岸の流れに春の日そそぐ

池 田 テ ル

今は亡き師より賜ひし色紙なり「心」のひともじ指針となりて

金 子 寿 子

雨もやみ野菜を採りに露の中触れるレタスに朝日さしをり

坂 本 信 子

水の辺に直ぐ立ち咲ける花菖蒲そぼ降る雨になほ活きいきと

鈴 木 時 子

新緑を写し静もる「朝里ダム」緑さまざま心和める

田 中 香 苗

久々に暑き日続き夕べには涼しさ求め庭に出でゆく

玉 谷 美 都 子

主逝きて荒れたる庭の大き樹のさくらんぼの実ふたつみつ見ゆ

丹 後 初 江

挽ぎたての絹莢豌豆塩茹でし鮮やかな緑煮物に添えむ

寺 田 カ ツ 子

バリアフリーのモデルハウス見学すその便利さに自立促さるる

仲 谷 喜 美 能

海の面に映ゆる白雲乱しつつ幾羽の鷗飛び立つにけり

堀 典 子

俳句

古平俳句会

連峰の裾を沈めて夏霞

越野清治

鯉のぼり石狩湾の風はらみ

斉藤波留

子の土産堇紫和みけり

山口悦子

烏賊釣の積丹岬近く置き

越野敏雄

春風に負けぬ気魄やごめ乱舞

大和田絵伊

夏の寺雀の群を障子越し

高橋重子

山の峰残雪ありて夕日澄む

外山俊久

池の水楓若葉のしげも濃き

堀 典 子

時化雲の沖に卵浪の立ちにけり

渡辺嘉之

潮の香のめぐる岬の若葉かな

室谷弘子

土に堪え万物芽吹く日差しかな

仲谷比呂古

古平町史年表

昭和37年(1962) ～続き

8/9: 台風9号・10号が相次いで襲来し風による被害は無かったが、豪雨で古平中学校付近の住宅が冷水川の増水により浸水する。

美国町では400戸ほどの住宅の冠水被害があり、自衛隊が救助に向かう

8/16: 中島グラウンドで鞍馬(ばんば)競走が行われ、積丹・余市町方面からも出走馬が来る

8/17: 昭和28年から新地町に開業していた渡辺医院が札幌へ転居する。その後に小野医院が開業する

8/31: 町村知事が水害状況の視察と、被害者への見舞いのため来町する

9/1: 古平小学校に特殊学級1学級(9名)が設置され、外山俊彦教諭が担任する

9/8: 小樽土木現業所小杉技師が海岸保全地域調査のため来町する

10/3: 古平町でブルドーザー(D-50型)を購入し、恵比須神社で入魂式を行う

10/9: 六志内開拓パイロット地区起工式が行われる

10/26: 古平町で災害復旧工事連絡用としてジープを購入する

11/24: 積丹国道の全線舗装が完成し、余市町で記念式典が行われる

11/2: 北海道財務局長谷好平ほかが古平漁港などを視察のため来町する

12/18: 浜町に電電公社古平駐在員詰所が新築落成する

12/28: 古平上水道事業の経営が道知事から認可される

12/-: 鉄興社(稲倉石鉱業所本社)が社報『ていけい』を発行する(創刊は1月号)



↑ 町営住宅付近の増水



↑ 町村知事が水害状況



↑ 六志内開拓予定地

社 報
ていけい
9 月 号

